

現代日本文学館

5

小林秀雄 編集

夏目漱石
II

文藝春秋

夏目漱石 Ⅱ

現代日本文学館

5

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 5

夏目漱石 2

昭和四十二年一月一日第一刷

著 者 夏 目 漱 石

発行者 上 林 吾 郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二二一
振替東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価 四八〇円

目次

それから 5

門 169

こころ 299

解説 江藤淳 451

注解 459

挿画 石川滋彦「それから」

稗田一穂「門」

中村琢二「こころ」

伝記は「夏目漱石(一)」に、年譜は「夏目漱石(三)」に収録

夏
目
漱
石
(二)

それから

一

誰か慌ただしく門前を馳けて行く足音がした時、代助の頭の中には、大きな組下駄が空から、ぶら下がっていた。けれども、その組下駄は、足音の速退くに従って、すうと頭から抜け出して消えてしまった。そうして眼が覺めた。

枕元を見ると、八重の椿が一輪疊の上に落ちてゐる。代助は昨夕床の中でたしかにこの花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護謄を天井裏から投げ付けたほどに響いた。夜が更けて、四隣が静かなせいかもしれないが、念のため、右の手を心臓の上に載せて、肋のはずれに正しく中る血の音を確かめながら眠りに就いた。

ほんやりして、少時、赤ん坊の頭ほどもある大きな花の色を見詰めていた彼は、急に思い出したように、寝ながら胸の上に手を当てて、また心臓の鼓動を検し始めた。寝な

がら胸の脈を聴いてみるのは彼の近來の癖になつてゐる。動悸は相変らず落ちついて確かに打つてゐた。彼は胸に手を当てたまま、この鼓動の下に、温かい紅の血潮の緩く流れる様を想像してみた。これが命であると考えた。自分は今流れる命を掌で抑えているんだと考えた。それから、この掌に伝へる、時計の針に似た響は、自分を死に誘う警鐘のようなものであると考えた。この警鐘を聞くことなしに生きていられたなら、——血を盛る袋が、時を盛る袋の用を兼ねなかつたなら、如何に自分は氣楽だろう。如何に自分は絶対に生を味わい得るだろう。けれども——代助は覺えず慄とした。彼は血潮によって打たる掛念のない、静かな心臓を想像するに堪えぬほどに、生きたがる男である。彼は時々寝ながら、左の乳の下に手を置いて、もし、ここを鉄槌で一つ撲されたらと思うことがある。彼は健全に生きていながら、この生きてゐるという大丈夫な事実を、ほとんど奇蹟のごとき僥倖とのみ自覺し出すことさえある。

彼は心臓から手を放して、枕元の新聞を取り上げた。夜具の中から両手を出して、大きく左右に開くと、左側に男が女を斬つてゐる絵があつた。彼はすぐ外の頁へ眼を移した。そこには学校騒動が大きな活字で出てゐる。代助は、しばらく、それを読んでいたが、やがて、倦怠そうな手からはたりと新聞を夜具の上に落とした。それから煙草を一本吹かしながら、五寸ばかり布団を摺り出して、畳の上の椿を取って、引續り返して、鼻の先へ持つて來た。口

と口髭と鼻の大部分がまったく隠れた。煙りは櫓の弁と窓に絡まって漂うほど濃く出た。それを白い敷布の上に置くと、立ち上がって風呂場へ行った。

そこで叮嚀に歯を磨いた。彼は歯並びのよいのを常に嬉しく思っている。肌を脱いで綺麗に胸と脊を摩擦した。彼の皮膚には濃やかな一種の光沢がある。香油を塗り込んだあとを、よく拭き取ったように、肩を揺かしたり、腕を上げたりするたびに、局所の脂肪が薄く漲って見える。かれはそれにも満足である。次に黒い髪を分けた。油を塗けないでも面白いほど自由になる。髭も髪同様に細くかつ初々しく、口の上を品よく蔽うている。代助はそのふくらした頬を、両手で両三度撫でながら、鏡の前にわが顔を映していた。まるで女がお白粉を付ける時の手つきと一般であった。実際彼は必要があれば、お白粉さえ付けかねぬほどに、肉体に誇りを置く人である。彼のもっとも嫌うのは羅漢のような骨格と相好で、鏡に向かうたんびに、あんな顔に生まれなくて、まあよかったと思うくらいである。その代人からお洒落と言われても、何の苦痛も感じ得ない。それほど彼は旧時代の日本を乗り超えている。

約三十分の後彼は食卓に就いた。熱い紅茶を啜りながら焼麴麴に牛酪を付けていると、門野という書生が座敷から新聞を畳んで持ってきた。四つ折りにしたのを座布団の傍へ置きながら、

「先生、大変なことが始まりましたな」と仰山な声で話し

かけた。この書生は代助を捕まえては、先生先生と敬語を使う。代助も、はじめ一二度は苦笑して抗議を申し込んだが、えへへ、だって先生と、すぐ先生にしてしまうので、已むを得ずそのままにしておいたのが、いつか習慣になって、今では、この男に限って、平氣に先生として通している。実際書生が代助のような主人を呼ぶには、先生以外に別段適当な名称がないということを、書生を置いてみて、代助も始めて悟ったのである。

「学校騒動のことじゃないか」と代助は落ちついた顔をして麴麴を食っていた。

「だって痛快じゃありませんか」

「校長排斥がですか」

「ええ、到底辞職もんでしょう」と嬉しがっている。

「校長が辞職でもすれば、君は何か儲かる事でもあるんですか」

「冗談言っちゃいけません。そう損得ずくで、痛快がられやしません」

代助はやっぱり麴麴を食っていた。

「君、あれは本当に校長がにくらしくって排斥するののか、ほかに損得問題があつて排斥するのしか知ってますか」と言いながら鉄瓶の湯を紅茶茶碗の中へ注した。

「知りません。何ですか、先生は御存じなんですか」

「僕も知らないさ。知らないけれども、今の人間が、得にならないと思つて、あんな騒動をやるもんかね。ありや方

便だよ、君」

「へえ、そんなもんですかな」と門野はやや真面目な顔をした。代助はそれぎり黙ってしまった。門野はこれより以上通じない男である。これより以上は、いくら行っても、へえそんなもんですかなで押し通して澄ましている。こちらの言うことが応えるのだから、応えないのだからまるで要領を得ない。代助は、そこが漠然として、刺激が要らなくていいと思って書生に使っているのである。その代り、学校へも行かず、勉強もせず、一日ごろごろしている。君、ちつと、外国語でも研究しちゃどうだなどと言うことがある。すると門野はいつでも、そうでしょうか、とか、そんなもんでしょとか、とか答えるだけである。決してましようということとは口にしない。またこう、怠惰ものでは、そう判然した答が出来ないのである。代助の方でも、門野を教育したに生まれて来たわけでもないから、いい加減にして放っておく。幸い頭と違って、身体の方はよく動くので、代助はそこを大いに重宝がっている。代助ばかりではない、従来からいる婆さんも門野のお蔭でこのごろは大変助かるようになった。その原因で婆さんと門野とはすこぶる仲がいい。主人の留守などには、よく二人で話をする。

「先生は一体何をする気なんだろうね。小母さん」

「あのくらいになっていらっしやれば、何でも出来ですよ。心配するものはない」

「心配はせんがね。何かしたらよさそうなもんだと思うん

だが」

「まあ奥様でもお貰いになってから、ゆっくり、御役でもお探しなさるおつもりなんでしょうよ」

「いいつもりだなあ。僕も、あんな風に一日本を読んだり、音楽を聞きに行ったりして暮らしていたいな」

「お前さんが？」

「本は読まんでもいいがね。ああいう具合に遊んでいたからね」

「それはみんな、前世からの約束だから仕方がない」

「そんなものかな」

まずこういう調子である。門野が代助の所へ引き移る二週間前には、この若い独身の主人と、この食客との間に下のような会話が あった。

「君はどっかの学校へ行ってるんですか」

「もとは行きましたがな。今は廃めちまいました」

「もと、どこへ行っただんです」

「どこって方々行きました。しかしどうもあきつぱいもんだから」

「じきいやになるんですか」

「まあ、そうですね」

「で、大して勉強する考えもないんですか」

「ええ、ちょっと有りませんな。それに近頃家の都合が、あんまりよくないもんですから」

「家の婆さんは、あなたのおつ母さんを知ってるんだって

ね」

「ええ、もと、直き近所に居たもんですから」

「おっ母さんはやっぱり……」

「やっぱりつまらない内職をしているんですが、どうも近頃は不景気で、あんまりよくないようです」

「よくないようですって、君、一所に居るんじゃないですか」

「一所に居ることは居ますが、つい面倒だから聞いたことありません。何でもよくこぼしてるようです」

「兄さんは」

「兄は郵便局の方へ出ています」

「家はそれだけですか」

「まだ弟がいます。これは銀行の——まあ小使に少し毛の生えたぐらいなところなんでしょう」

「すると遊んでるのは、君ばかりじゃないか」

「まあ、そんなもんですな」

「それで、家にいるときは、何をしているんです」

「まあ、大抵寝ていますな。でなければ散歩でもしますかな」

「外のものが、みんな稼いでるのに、君ばかり寝ているのは苦痛じゃないですか」

「いえ、そうでもありませんな」

「家庭がよっぽど円満なんですか」

「別段喧嘩もしませんがな。妙なもんで」

「だって、おっ母さんや兄さんから言ったら、一日も早く君に独立してもらいたいでしょうがね」

「そうかもしれないな」

「君はよっぽど気楽な性分と見える。それが本当のところなんですか」

「ええ、別に嘘を吐く料簡もありませんな」

「じゃまったくの呑気屋なんだね」

「ええ、まあ呑気屋っていうもんでしょうか」

「兄さんは何歳になるんです」

「こうつと、取って六になりますか」

「すると、もう細君でも貰わなくちゃならないでしょう。兄さんの細君が出来ても、やっぱり今のようになっているつもりですか」

「その時になってみなくっちゃ、自分でも見当が付きませんが、何しろ、どうかなるだろうと思ってます」

「その外に親類はないんですか」

「叔母が一人ありますがな。こいつは今、浜で運漕業をやってます」

「叔母さんが？」

「叔母がやってるわけでもないんですが、まあ叔父ですな」

「そこへでも頼んで使ってもらっちゃ、どうです。運漕業なら大分人が要るでしょう」

「根が怠惰もんですからな。大方断わるだろうと思ってる

んです」

「そう自任していちや困る。実は君のおつ母さんが、家の婆さんに頼んで、君を僕の宅へ置いてくれまいかという相談があるんですよ」

「ええ、何だかそんなことを言っていました」

「君自身は、一体どういう気なんです」

「ええ、なるべく怠けないようにして……」

「家へ来る方がいいんですか」

「まあ、そうですね」

「しかし寝て散歩するだけじゃ困る」

「そりゃ大丈夫です。身体の方は達者ですから。風呂でも何でも汲みます」

「風呂は水道があるから汲まないでもいい」

「じゃ、掃除でもしましょう」

門野はこういう条件で代助の書生になったのである。

代助はやがて食事を済まして、煙草を吹かしだした。今まで茶簾の陰に、ぼつねんと膝を抱えて柱に倚り懸かっていた門野は、もういい時分だと思って、また主人に質問を掛けた。

「先生、今朝は心臓の具合はどうですか」

この間から代助の癖を知っているので、幾分か茶化した調子である。

「今日はまだ大丈夫だ」

「何だか明日にも危しくなりそうですね。どうも先生みた

ように身体を気にしちゃ、——仕舞には本当の病気に取っ付かれるかもしれませんよ」

「もう病氣ですよ」

門野はただへええと言ったがり、代助の光沢のいい顔色や肉の豊かな肩のあたりを羽織の上から眺めている。代助はこんな場合になるといつでもこの青年を気の毒に思う。代助から見ると、この青年の頭は、牛の脳味噌で一杯詰まっているとしか考えられないのである。話をすると、平民の通る大通りを半町ぐらいしか付いて来ない。たまに横町へでも曲がると、すぐ迷兎になってしまう。論理の地盤を堅に切り下げた坑道などへは、てんから足も踏み込めない。彼の神経系に至ってはなおさら粗末である。あたかも荒縄で組み立てられたかの感が起る。代助はこの青年の生活状態を観察して、彼は必竟何のために呼吸をあえてして存在するかを怪しむことさえある。それでいて彼は平氣にのらくらしている。しかもこののらくらをもつて、暗に自分の態度と同一型に属するものと心得て、中々得意に振舞いたがる。その上頑強一点張りの肉体を笠に着て、かえって主人の神経的な局所へ肉薄してくる。自分の神経は、自分に特有なる細緻な思索力と、鋭敏な感応性に対して払う租税である。高尚な教育の彼岸に起こる反響の苦痛である。天爵的に貴族となった報いに受ける不文の刑罰である。これらの犠牲に甘んずればこそ、自分は今の自分になった。否、ある時はこれらの犠牲そのものに、人生の意義をまと

もに認める場合さえある。門野にはそんなことはまるで分らない。

「門野さん、郵便は来ていなかったかね」

「郵便ですか。こうつと。来ていました。端書と封書が。机の上に置きました。持って来ますか」

「いや、僕があつちへ行つてもいい」

齒切れのわるい返事なので、門野はもう立つてしまった。そうして端書と郵便を持って来た。端書は、今日二時東京着、ただちに表面へ投宿、とりあえず御報、明日午前会いまし、と薄墨の走り書きの簡単きわるもので、表に裏神保町の宿屋の名と平岡常次郎という差出人の姓名が、裏と同じ乱暴さ加減で書いてある。

「もう来たのか、昨日着いたんだな」と独り言のように言いながら、封書の方を取り上げると、これは親爺の手蹟である。二三日前帰つて来た。急ぐ用事でもないが、色々話しがあるから、この手紙が着いたら来てくれろと書いて、あとには京都の花がまだ早かったの、急行列車が一杯で窮屈だったなどという閑文字が数行列ねてある。代助は封書を巻きながら、妙な顔をして、両方見較べていた。

「君、電話を掛けてくれませんか。家へ」

「はあ、お宅へ。何て掛けます」

「今日は約束があつて、待ち合わせる人があるから上がれない。明日か明後日きつと伺いますから」

「はあ。何方に」

「親爺が旅行から帰つて来て、話があるからちよつと来いって言うんだが、——なに親爺を呼び出さないでもいいから、誰にでもそう言つてくれたまえ」

「はあ」

門野は無雑作に出て行つた。代助は茶の間から、座敷を通つて書斎へ歸つた。見ると、奇麗に掃除が出来ている。落椿もどこかへ掃き出されてしまつた。代助は花瓶の右手にある組み重ねの書棚の前へ行つて、上に載せた重い写真帖を取り上げて、立ちながら、金の留金をはずして、一枚二枚と繰り始めたが、中ごろまで来てびたりと手を留めた。そこには廿歳ぐらいの女の半身がある。代助は眼を俯せてじつと女の顔を見詰めていた。

二

着物でも着換えて、こつちから平岡の宿を訪ねようかと思つているところへ、折よくむこうからやつて来た。車をがらがらと門前まで乗り付けて、ここだここだと櫓棒を下ろさした声はたしかに三年前分かれた時そっくりである。玄関で、取次の婆さんを捕まえて、宿へ藝口を忘れて来たから、ちよつと二十銭貸してくれと言つたところなどは、どうしても学校時代の平岡を思い出さずにはいられない。代助は玄関まで馳け出して行つて、手を執らぬばかりに旧友を座敷へ上げた。

「どうした。まあゆつくりするがいい」

「おや、椅子だね」と言いながら平岡は安楽椅子へ、どきりと身体を投げ掛けた。十五貫目以上もあるというわが肉に、三文の価値を置いていないような抜かい方に見えた。それから椅子の背に坊主頭を靠たして、ちょっと部屋のうちを見廻しながら、

「中々、いい家だね。思ったよりいい」と賞めた。代助は黙って巻入れの蓋を開けた。

「それから、以後どうだい」

「どうの、こうのって、——まあ色々話すがね」

「もとは、よく手紙が来たから、様子が分かったが、近頃じゃちつとも寄こさないもんだから」

「いやどこもかしこも御無沙汰で」と平岡は突然眼鏡をはずして、背広の胸から皺だらけの手巾を出して、眼をばち

ばちさせながら拭き始めた。学校時代からの近眼である。

代助はじつとその様子を眺めていた。

「僕より君はどうだい」と言いながら、細い蔓を耳の後ろへ絡みつけに、両手で持って行った。

「僕は相変らずだよ」

「相変らずが一番いいな。あんまり相変るものだから」

そこで平岡は八の字を寄せて、庭の模様を眺め出したが、不意に語調を更えて、

「やあ、桜がある。今ようやく咲き掛けたところだね。よほど氣候が違う」と言った。話の具合が何だかもとのようにしんみりしない。代助も少し気の抜けた風に、

「向うは大分暖かいだろう」とついで同然の挨拶をした。すると、今度はむしろ法外に熱した具合で、

「うん、大分暖かい」と力のはいた返事があつた。あたかも自己の存在を急に意識して、はつと思つた調子である。代助はまた平岡の顔を眺めた。平岡は巻入れに火を点けた。

その時婆さんがようやく急須に茶を淹れて持つて出た。今しがた鉄瓶に水を注してしまつたので、煮立てるのに暇がいつて、つい遅くなつてすみませんと言訳をしながら、洋卓の上へ盆を載せた。二人は婆さんの喋舌つてゐる間、紫檀の盆を見て黙っていた。婆さんは相手にされないの、独りで愛想笑いをして座敷を出た。

「ありや何だい」

「婆さんさ。雇つたんだ。飯を食わなくっちゃならないから」

「お世辞がいいね」

代助は赤い唇の両端を、少し弓なりに下の方へ彎けて、蔑むように笑つた。

「今までこんな所へ奉公したことがないんだから仕方がない」

「君の家から誰か連れて来ればいいのに。大勢いるだらう」

「みんな若いばかりでね」と代助は真面目に答えた。平岡はこの時始めて声を出して笑つた。

「若けりやなお結構じゃないか」

「とにかく家の奴はよくないよ」

「あの婆さんの外に誰かいるのかい」

「書生が一人いる」

門野はいつの間にか帰って、台所の方で婆さんと話をしていた。

「それぎりかい」

「それぎりだ。なぜ」

「細君はまだ貰わないのかい」

代助は心持赤い顔をしたが、すぐ尋常一般のきわめて平凡な調子になった。

「妻を貰ったら、君の所へ通知ぐらいするはずじゃないか。それよりか君の」と言いかけて、ぴたりと已めた。

代助と平岡とは中学時代からの知り合いで、ことに学校を卒業した後、一年間というものは、ほとんど兄弟のように親しく往来した。その時分は互いにすべてを打ち明けて、互いに力になり合うようなことを言うのが、互いに娯樂のもっともなるものであった。この娯樂が變じて実行となつたことも少なくないので、彼らは相互のために口にしたすべての言葉には、娯樂どころか、常に一種の犠牲を含んでいると確信していた。そうしてその犠牲を即座に払えば、娯樂の性質が、忽然苦痛に變ずるものであるという陳腐な事実にさえ気が付かずにいた。一年の後平岡は結婚した。

同時に、自分の勤めている銀行の、京坂地方のある支店詰めにあった。代助は、出立の当時、新夫婦を新橋の停車場

に送って、愉快そうに、直き帰って来たまゑと平岡の手を握った。平岡は、仕方がない、当分辛抱するさとうっちゃるように言ったが、その眼鏡の裏には得意の色が羨ましいくらい動いた。それを見た時、代助は急にこの友達を憎らしく思った。家へ帰って、一日部屋へはいつたなり考え込んでいた。嫂を連れて音楽会へ行くはずのところを断わって、大いに嫂に氣を揉ましたくらいである。

平岡からはたえず音便があつた。安着の端書、向うで世帯を持った報知、それが済むと、支店勤務の模様、自己將來の希望、色々あつた。手紙の来るたびに、代助はいつも丁寧な返事を出した。不思議なことに、代助が返事を書くときは、いつでも一種の不安に襲われる。たまには我慢するのがいやになって、途中で返事を已めてしまうことがある。ただ平岡の方から、自分の過去の行為に対して、幾分か感謝の意を表して来る場合に限って、安々と筆が動いて、比較的なだらかな返事が書けた。

そのうち段々手紙の遣り取りが疎遠になって、月に二遍が、一遍になり、一遍がまた二月、三月に跨るようになる。置いてくると、今度は手紙を書かない方が、かえって不安になって、何の意味もないのに、ただこの感じを駆逐するために封筒の糊を湿すことがあつた。それが半年ばかり続くうちに、代助の頭も段々組織が変わってくるように感ぜられてきた。この変化に伴って、平岡へは手紙を書いても書かなくつても、まるで苦痛を覚えないようになって

てしまった。現に代助が一戸を構えて以来、約一年余というもの、この春年賀状の交換のとき、ついでをもつて、今の住所を知らしただけである。

それでも、ある事情があつて、平岡のことはまるで忘れるわけにはゆかなかつた。時々思い出す。そうして今ごろはどうして暮らしているだろうと、色々に想像してみることがある。しかしただ思い出すだけで、別段問ひ合わせたり聞き合わせたりするほどに、氣を揉む勇氣も必要もなく、今日まで過ごしてきたところへ、二週間前に突然平岡からの書信が届いたのである。その手紙には近々当地を引き上げて、御地へまかり越すつもりである。ただし本店からの命令で、榮転の意味を含んだ他動的の進退と思つてくれなくては困る。少し考へがあつて、急に職業替えをする氣になつたから、着京の上は何分よろしく頼むとあつた。この何分よろしく頼むの頼むは本當の意味の頼むか、または単に辞令上の頼むか不明だけれども、平岡の身上に急劇な変化のあつたのは争うべからざる事實である。代助はその時はつと思つた。

それで、逢うや否やこの變動の一部始終を聞こうと待ち設けていたのだが、不幸にして話が外れて容易にそこへ戻つて来ない。折を見てこつちから持ち掛けると、まあゆつくり話すとか何とか言つて、中々埒を聞けない。代助は仕方なしに、仕舞に、

「久し振りだから、そこいらで飯でも食おう」と言い出し

た。平岡は、それでも、まだ、いずれゆつくりを繰り返したがるのを、無理に引つ張つて、近所の西洋料理へ上がった。兩人はそこで大分飲んだ。飲むことと食うことは昔の通りだねと言つたのが始まりで、硬い舌が段々弛んできた。代助は面白そうに、二三日前自分の観に行つた、ニコライの復活祭の話をした。お祭が夜の十二時を相図に、世の中の寝鎮まるころを見計らつて始まる。参詣人が長い廊下を廻つて本堂へ歸つて来ると、いつの間にか幾千本の蠟燭が一度に点いている。法衣を着た坊主が行列して向うを通るときに、黒い影が、無地の壁へ非常に大きく映る。——平岡は頰杖を突いて、眼鏡の奥の二重瞼を赤くしながら聞いていた。代助はそれから夜の二時ごろ広い御成街道を通つて、深夜の鉄軌が、暗い中を真直ぐに渡っている上を、たった一人上野の森まで来て、そうして電燈に照らされた花の中にはいった。

「人氣のない夜桜はいいもんだよ」と言つた。平岡は黙つて盃を干したが、ちよつと氣の毒そうに口元を動かして、「いいだろう、僕はまだ見たことがないが。——しかし、そんな真似が出来る間はまだ氣楽なんだよ。世の中へ出ると、中々それどころじゃない」と暗に相手の無経験を上から見たようなことを言つた。代助にはその調子よりもその返事の内容が不合理に感ぜられた。彼は生活上世渡りの経験よりも、復活祭当夜の経験の方が、人生において有意義なものと考えている。そこでこんな答をした。

「僕はいわゆる処世上の経験ほど愚なものはないと思つてゐる。苦痛があるだけじゃないか」

平岡は酔つた眼を心持大きくした。

「大分考えが違つてきたようだね。——けれどもその苦痛が後から薬になるんだつて、もとは君の持説じゃなかったか」

「そりゃ不見識な青年が、流俗の諺に降参して、いい加減な事を言つていた時分の持説だ。もう、とつくに撤回しちまつた」

「だつて、君だつて、もう大抵世の中へ出なくっちゃなるまい。その時それじゃ困るよ」

「世の中へは昔から出ているさ。ことに君と分かれてから、大変世の中が広くなつたような気がする。ただ君の出ている世の中とは種類が違ふだけだ」

「そんな事を言つて威張つたつて、今に降参するだけだよ」

「無論食うに困るようになれば、いつでも降参するさ。しかし今日に不自由のないものが、何を苦しんで劣等な経験を嘗めるものか。印度人が外套を着て、冬の来た時の用心をすると同じことだもの」

平岡の眉の間に、ちよつと不快の色が閃めいた。赤い眼を据えてぶかぶか煙草を吹かしている。代助は、ちと言ひ過ぎたと思つて、少し調子を穏やかにした。——

「僕の知つたものに、まるで音楽の解らないものがある。学校の教師をして、一軒じゃ飯が食えないもんだから、三

軒も四軒も懸け持ちをやっているが、そりゃ気の毒なもので、下読みをするのと、教場へ出て器械的に口を動かしているより外にまったく暇がない。たまの日曜などは骨休めとか号して一日ぐうぐう寝ている。だからどこに音楽会があろうと、どんな名人が外国から来ようと聞きに行く機会がない。つまり楽という一種の美くしい世界にはまるで足を踏み込まないで死んでしまわなくっちゃならない。僕から言わせると、これほど憐れな無経験はないと思う。麵麴に關係した経験は、切実かもしれないが、要するに劣等だよ。麵麴を離れ水を離れた贅沢な経験をしなくっちゃ人間の甲斐はない。君は僕をまだ坊っちゃんだと考へてゐるらしいが、僕の住んでいる贅沢な世界では、君よりずっと年長者のつもりだ」

平岡は巻貝の灰を、皿の上にはたきながら、沈んだ暗い調子で、

「うん、いつまでもそういう世界に住んでいられれば結構さ」と言つた。その重い言葉の足が、富に對する一種の呪詛を引き摺つているように聴こえた。

兩人は酔つて、戸外へ出た。酒の勢いで変な議論をしたものだから、肝心の一身上の話はまだ少しも發展せずにいる。「少し歩かないか」と代助が誘つた。平岡も口ほど忙がしくはないと見えて、生返事をしながら、一所に歩を運んで来た。通りを曲がつて横町へ出て、なるべく、話のしい閑かな場所を選んで行くうちに、いつか緒口が付いて、思